

パリ・モンマルトルの丘の麓にある市立アル・サンピエール美術館。2010年3月、石狩管内当別町の社会福祉法人ゆうゆうの大原裕介理事長(34)は、開催中だった「アール・ブリュット・ジャポネ展」に足を運んでいた。

スイスで日本の障害者の作品展を見て感銘を受けた館長が、滋賀県社会福祉事業団の協力を得て実現し、大きな反響を呼んでいた。日本の障害者による絵や木工を前に、来館者が「素晴らしい」とため息をつくの聞き、大原理事長の思いは高まった。「障害者の美術館を道内に建て、活躍の場を広げたい」

### ■障害者美術館を

アール・ブリュットは、知的障害などで美術の専門教育を受けていない「生の

## 地域を創る 当別 ゆうゆうの挑戦

①

芸術」という意味。大原理事長が思い描くのは、田村準起さん(27)の絵だ。ゆうゆうが運営する町内の喫茶店「オープンサロン・ガーデン」で働きながら、週末に色鉛筆を手にする。題

材はライオンやシロクマなどの動物やテレビで見たタレント、想像上の世界など。これがスタッフの間で評判となり、田村さんの愛称は「画伯」に。その絵は、ゆうゆうのパンフレットや

ホームページに登場するようになった。「絵を描くのが好きだから、描き続けた」と田村さん。これまで描いた絵は大切に保存し、来るべき日に備えている。ゆうゆうは従来の社会福

祉法人のイメージにとどまらない事業展開を視野に入れている。昨年9月からは、札幌市内の社会福祉法人が運営する特別養護老人ホームに当別産のジャガイモやニンシ

ゆうゆうは、05年に前身となるNPO法人を設立して以来、当別町と江別市内に障害者の就労支援拠点やデイサービスセンター、在宅介護支援センターなど10事業所を展開。原点は、大原理事長が大学院生時代に始めた障害者の一時預かりサービスだ。障害児の母親が「私が死んだ後、この子はどうなるのか」と不安を訴える現状を目の当たりにした。障害者の就労拠点を作り、高齢者や地域住民を巻き込んだ総合支援へと駆け足で発展させてきた。

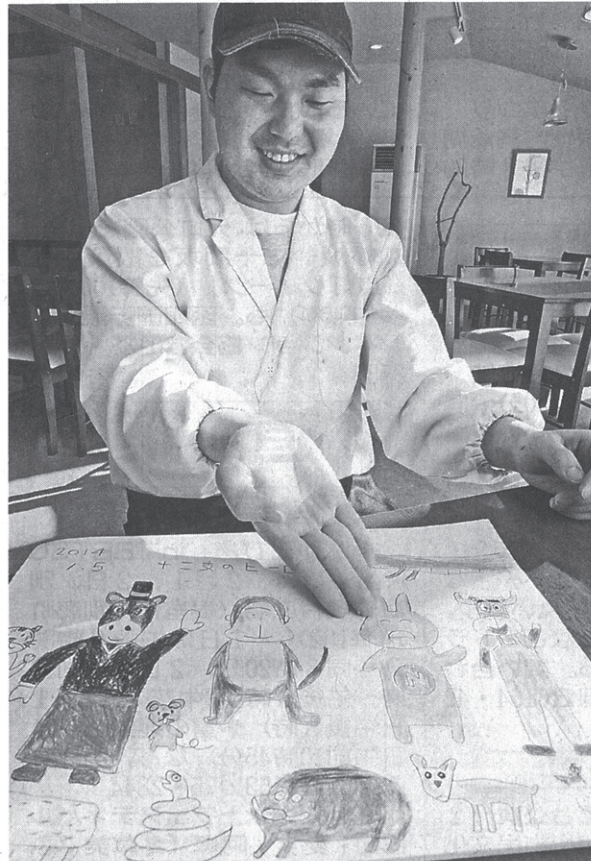
### 新機軸

## 福祉の枠超え 事業展開

ンなどの野菜を納入。野菜の洗浄や箱詰めをしているのは、町内の和食レストランで働く障害者だ。

### ■可能性引き出す

今年3月には、町内の北海道医療大学内に、原宿や渋谷などで展開しているカフェのフランチャイズ店を道内で初めて開店させる。カフェで障害者が働き、学生と接することで、新たな可能性を引き出せると考えている。



自ら描いた「十二支」を見せて説明する田村準起さん

「既存の施設やサービスにないものは、自分たちで創ってきた。そんなに生き急いでどうするのかわからないことも聞かれることもあるが、時代は待ってくれない」と大原理事長。誕生から10年、ゆうゆうは走り続ける。

発信